
エチュード

唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エチユード

【Nコード】

N0696P

【作者名】

唯人

【あらすじ】

主人公「私」が夢の中をさまよい、辿りつく話です。

（前書き）

初書き初投稿です。下手ですがよかったら読んでください。

月が蒼い

ビルの屋上そのフェンスの上で私は街を見下ろしていた

街には明かりがついているが人の気配はない

人の気配は……

タッタッタ

獣が走る音が聞こえる

音はだんだん私に近づいてきていた

助走をつけ跳躍、私の背後に一瞬足を着け一気に私に跳びかかる

振り向いた私の目には耳まで裂けた口をあけた人狼が映った

振り向きざまに抜き放った灰鞘が人狼を頭から切り裂く

私を狙った鉤爪がむなしく虚空を掻き、人狼は夜に還っていった

名前と年齢、後は…

思い出せない

フェンスによしかかり私はため息をついた

なんというか人生がいきなり始まった感じだ

気がつくとスクランブル交差点の真ん中に私は立っていた

手には灰鞘となんとなく私が名付けた剣、そして、ここが私の夢のなかだというよく分からない確信

「まいったね。まったく」

灰色のコートからタバコを取り出しマッチで火をつける

タバコをくわえ、紫煙を吐き出し目をつぶった

ここに来てから大分経つが、ここはいつも夜でおまけに人ではないものが溢れている

ここに来て私は何かが変わった

ためらい無く獣と戦い殺す

ここに来る前の私もそうだったのだろうか

紫煙をもう一度吐き出し、気持ちを切り替え目を開いた
遠くに塔のような影が見える

このわけのわからない世界をさまようにあたって私はあの塔を目指
していた

特に意味は無い、ただなんとなく

それにしても、全然近づけた気がしない

私はため息をついてフェンスから身体を離れた

近づいているかわからないがとにかく進むために

紅い月が空に浮かんでいる

私は荒野に立っていた

フェンスから身体を離れた瞬間、まるで最初からそうだったかのよ
うに私の周りが荒野になっていた

いや、荒野に移動したのか

どうでもいいが

どの道ここから出られるわけではない

辺りを見回すととりあえず目標にした塔のような影が見えた

ということはあの街から近いのだろうか？あるいは塔がものすごく
巨大でどこからでも見えるとか

ふむ、よく分からない。分かることはとりあえずここにいてもしよ
うがないということだ。どこに行ってもしょうがないかもしれない
が……

私はとりあえず歩くことにした

止まるな、前でも後ろでもとにかく進め何でも進めとは私の友人の
口癖だ

友人？私には友人がいるのか？

私はその友人のことを思い出そうとしたがどうもうまくいかなかった
友と呼べる人がいる私はいまいち想像できない

脳内友人とかじゃないことを祈ろう

私の記憶は戻ることがある

それが分かったことだけでも前進だ

その前進に意味はあるのか分からないが

どうも私はポジティブとネガティブが交じり合う

上げて落とす

アップ&ダウン

光が見え、意味の無い思考を私は止めた

灰鞘がいつのまにか現れ私の手に握られる

灰鞘は鏢のない直剣で鞘に収めると杖に見える。必要な時は虚空から取り出せる不思議な剣だ

そこは集落のようだった

荒野の中そこだけは緑が豊かで背の高い木も生えている。オアシスのようなところに作られた集落のようだ

そこでは鬼たちが剣の舞を踊っていた

かなり広い広場で巨大な篝火を前に鬼たちが舞っている

鬼といっても角があるからそう思っただけで他は人とあまり変わらない。鬼たちはどれも美男美女で巨大な炎の前での舞いは幻想的で命を感じさせる光景だった

篝火の前で鬼たちは踊る、どこからか太鼓や笛の音がするが私が見た限り、太鼓を鳴らす鬼も太鼓も見当たらなかった

どこからかする太鼓の音に合わせて、鬼たちは刀をあるいは槍を持つて舞う

私はふと鬼の数が減り始めてるのに気づいた

誰かが槍を刀を振るうたびに鬼が一人また一人切り裂かれ貫かれ夜に還っていく

これは舞ではなく闘争なのだと私は気づいた

鬼たちは舞う

そのたびに誰かが消える

笛の音が激しくなり太鼓が打ち鳴らされる

舞う舞う舞って舞い舞う

舞い狂う

等割地獄

鬼たちの動きは激しくなり

気がつくとも笛の音も太鼓も止んでいた

篝火の前には一際美しい女性の鬼が青竜刀のような刀を持って佇んでいる

彼女がこの舞の勝者らしい

炎が彼女をたたえる様に燃え盛る

途絶えていた笛の音がまた流れ始めた

彼女がゆつくりとこちらを向き私を見る、彼女の眼は狂気と殺意と快楽で妖しく蕩けていた

鬼という認識は間違っていなかった

私は前に進み出る

太鼓が打ち鳴らされ始めた

それは心臓の鼓動に似ている

殺意を向けるものに容赦はするな

ここに来たときに一番最初に学んだことである

惹かれあうように私と彼女は進み出、同時に走った

彼女と私には結構な身長差がある

振り下ろされた剣を灰鞘を頭上にかざす様にして受け、受け流す

鞘から剣を抜き放ち身体を回転させながら切りつけ、跳躍し避けた

彼女を灰鞘が追い青竜刀が迎え撃つ

剣と剣が交じり合い、耳障りな声を上げ私と彼女は舞った

何度も身体を入れ替え複雑にステップを踏み剣を避け弾き時折血と肉が舞う

彼女は嗤っていた。楽しくて仕方がないとも言つように

私は笑わなかった

彼女と私の違いはそこだけだ。後は些細でしかない

二人獣となって舞う

何故、私は戦っているのだろうか？

ふと何度も思ってきた疑問が頭をよぎる

彼女を蹴り飛ばし、距離をとる
背にある巨大なかがり火が熱い

何故私は戦っているのだろう

私は急激に冷めていた。心から何かが抜け落ちた感触
一直線に向かつてくる彼女を私はその場を動かず見る
彼女が剣を振る瞬間

それよりも速く踏み込み一閃、私は彼女を切り裂いた
彼女は夜に還った

人の形をしたものを何の感慨も無く斬った
それはつまりどうということなんだろうか？

眠い

私はあくびを噛み殺した

夢の中でも眠くなるらしい

眠れるかどうか少し試してみようか

ぼんやりとそんなことを思いながら私は目をこすった

夜の繁華街

目をこすり気づくと私はその雑踏にいた

また移動したらしい

そこは異形が溢れる街だった

赤ん坊の顔をした肥満体が雨蛙の顔をしたホステスらしき服装のもの
と話し込み、四本足の得体の知れない何かが傍らを通り、それを
追うように狐の面をかぶった子供達が駆けていく

仮面で顔を半分隠した獣のような美女が私にウインクし傍らの蛇の
ような少年が笑いながらその美女に何事が囁いていた

しかし、人じゃない人が多い

こういう混雑しているところは苦手だ、音が溢れすぎて気持ち悪い
私は裏道に入った

裏道は表と違い廃墟が立ち並んでいる、ときおり廃墟の中に何か黒
い塊が動いているのが見えた

ここのほうが落ち着く

私は休憩するために廃墟の柱によしかかった

タバコを取り出し火をつける

鬼との舞踏で私は傷だらけだった

傷を見てみると血がゆつくりと夜に還り、その代わり驚異的な速さで傷がふさがっている。この分ならば完全に直るまでそう時間もかからないだろう

「便利な世界」

まるで戦いを前提としているような

ここは本当に私の夢の中だろうか

自分に問いかけてみる、しかしそれにはなぜか確信をもっている自分があった

「記憶が戻れば……いいんだけど」

「何か探し物かね」

私の独り言に答えるものがいた

顔を上げるといつからいたのかでつぶりと太った兎が私の向かいの柱にもたれていた。両手で抱えるようにして赤い液体の入ったワイングラスを持ち、目が眠そうに半分閉じている

「ここから出る方法を探しているんです」

私は駄目もとで試してみた

太りすぎの兎は何か思案しているのか単に鈍いのか、しばらくしてから口を開いた

「…塔を指すといいよ」

そういつて兎はゆつくりと塔の影を指差した

いや、それはもう目指してる

「目指すも何もころころ自分の居場所が変わるんですけど」

兎はゆつくりと塔をさしていた指を降ろし、そしてまたゆつくりとワイングラスを持ち上げ中の液体を飲んだ

かなり長い時間口をつけていたがワイングラスの中の液体が減った様子はない

ワイングラスに入っているからやっぱり赤ワインかなと思っている
と兎はやつと口を開いた

「…その内着くよ」

かなり適当なことを言つと兎はゆっくりと消えた

うなり声が聞こえた

太りすぎな兎が消えた後、私は相変わらず路地裏を彷徨っていた
どこを曲がっても同じ景色が続いている

黒い影が蠢く廃墟の群れ、その間をぶらぶらと進む

同じ景色の連続にいい加減飽きてきたとき、うなり声が聞こえた
辺りを見回すと獣顔の集団がぞろぞろとどこから現れ道を塞いだ
こいつらかと思ったがリーダーっぽい猪顔が何かを喚いたのを筆頭
に全員一斉に喚き始めた声を聞く限り違う

何かを要求してるような雰囲気だが何を言ってるかわからない

私は何も反応しないのに怒ったのか猪顔が腰の手斧を投げた

それは威嚇のためかもしれないが私は反射的に灰鞘で弾いていた
弾かれた手斧は当たり所がよかったのか来たときよりも勢いをつけ
てはね返り猪顔の頭に刺さる

場が凍った

時間が止まったかのように皆が動きを止める中、猪顔だけが動き、
崩れ落ち夜に還った

一拍の間

獣顔の集団は一斉に咆哮し襲い掛かってきた
弱すぎる

斧が槍が剣が一斉に繰り出されるが遅すぎる

そして、獣顔たちも武器も脆すぎた

灰鞘が触れるたびに粗末な武器と鎧ごと獣顔たちは切り裂かれて夜
に還った

攻撃をかわして斬る

ただそれを繰り返すだけの単調な戦い

気がつけば獣顔たちは全員夜に還っていた
流れた血はなぜか夜に還るのが遅い

死体が夜に還っても残り火のようにゆっくりと赤い液体が夜に立ち
昇っていく。それは仄かに光っているようにも見えた

月が黄色い

夜の空気が変わった

一つの咆哮が夜の空気を震わせる

殺気が膨れ上がり私はとっさに前に跳んだ

一瞬前、私がいたところが爆散する

爆風で飛ばされた私は体勢を立て直し、振り返りそこに巨猿が着地
しているのを見た

一つの巨大な目に複数の目玉が詰まり、それぞれが勝手な方向を見
ている。両手に棍棒を構え、牙の生えた口から低いうなり声と青白
い吐息が洩れていた

灰鞘を鞘から引き抜く、灰鞘と名付けた割には鞘が結構邪魔だ
腰に挿そうとしたが相手はそんなに待つてはくれなかった

意外な速さで巨猿は私との距離を詰め棍棒が振り下ろされる、私は
横に跳んでかわすがそこに二本目の棍棒が横薙ぎに振られた。大き
く私は後方に宙返りをした、棍棒が起こす風が髪をなびかせる
着地し巨猿に向かって走り出す

巨猿は廃墟を棍棒で打ち崩した。巨大なコンクリ塊がいくつも降り
注ぐ

これぐらいならかわせないこともない。ただ問題は……

コンクリートを弾幕にして二本の棍棒が襲いかかる

近づけない

私は無理矢理また後ろに下がり、近くの廃墟の中に駆け込んだ
別に戦う必要はない

私は廃墟の壁を斬り破り逃走した

何故、今まで私は戦ってきたのだろうか

逃げながら思う、背後からは巨猿が追ってくる音が響いてくる

やむをえなく？自分を守るために？
いや、私は望んで剣を振るっていた
誰も自らを偽ることはできない

これも友人の言葉だったはず
「誰も自らを偽ることはできない」

声に出して呟いてみる

何故、私は戦うのか

廃墟を抜けまた廃墟に飛び込む、壁を斬り破り抜ける

抜けた先には巨猿が待ち構えていた

先回りしていたらしい

雄叫びと共に振られる棍棒が、スローモーションに見える

何故私は戦うのか

何度もその疑問が頭をよぎる

そんなこと私にわかりはしない

私は地を蹴って更に加速する

棍棒が生む風圧が私に死を感じさせる

私は少し笑ったかもしれない

地に体が着きそうなほど身を低くする、頭上ギリギリのところを巨猿の腕が通っていき、私は巨猿の懷にたどり着く

私は一気に斬り上げた

巨猿の股から頭頂まで灰鞘が通り抜け巨猿は夜に還った

背後と前方の廃墟が崩れた。続いてその左右の廃墟が崩れ始める
崩壊の連鎖は止まらず私の視界を覆うほどに粉塵があたりに舞う
粉塵はいつしか湿り始めそれは霧となった

かがり火に左右を挟まれ石畳が延々と続いている

霧が晴れると私はそんな場所にいた

「……のはよう」

かがり火にもたれるようにして太りすぎの兎がいた
ワイングラスの中の液体が今度は白くなっている

白ワインだろうか？

「のはよう？」

「……この先に行くの？」

マイペースに眠たげに兎は私を見上げた

「まあ、とりあえず」

「……危険だよ」

それは、今更の話だ

「じゃあ、他の道があるの？」

「……帰るにはないね」

「じゃあ、選択肢が他にないね」

「……まあ…そうだね」

兎はふむふむと頷き。ゆっくり消えた

結局、何で現れたのか

ぶらぶらと石畳を辿る

まるで江戸時代にありそうな巨大な門に辿りついた

門は少し開いている

私は隙間から入った

門の中は静かに雨が降っていた

ここは城下町のような

家々が燃えている。長屋のような古い家屋が燃えていた

そのおかげで明るい

そして町のいたるところで血がゆっくり夜に還っていく最中だった

とりあえず奥に見える城に向かって歩いていく

大通りに出たところで足を止めた

なにかが走ってくる

死を感じる

道を曲がって大通りになにかが出てきた

止まる

それと私は対峙した

それは着流しを着た人のように見えた。中性的な顔をしている。体

つきからして女性だろうか、長い髪を束ね、手には夜に還る血が付いた刀、紅い瞳で私を見ている

瞳に宿るのは殺意と狂気、そして、狂喜

月が白い

雨傘をかぶった鎧武者に着流しの女性は四方を囲まれた

鎧武者は槍を構えている

それは静かな戦いだった

突き出された槍の上に体重を感じさせない動きで女性は乗り、刀で鎧武者の首を跳ねた

速い

首を跳ねた瞬間にはもう、地に下りて傍らの鎧武者の胴体を薙いでいる

二体の鎧武者が夜に還った

背後から突き出された二本の槍を後方宙返りで避け着地

二閃

更に二体の鎧武者が夜に還った

紅い瞳がこちらを見る

私は三つの自分を感じた

勝てるかなと戦う気にいる自分

戦う気にいる自分にもう好きにしてくれと投げやりな気持ちで思っている自分

その二つを感じている自分だ

どの自分にせよ戦いを止める自分はいない

灰鞘を抜く

女性は肉迫し垂直に剣を振り下ろした、半歩横にずれて回避した私を返す刀で追う鞘で刀を受け腕をクロスさせるように刃を突き出した。刀に押されるように後ろに下がり女性は更に跳んで止まる

女性は嗤っていた

鬼舞の女性を思い出す。

死が限りなく近づけば生も限りなく近づく

二つは連動する。片方が輝けばもう一つも輝く
どうでもいいが

私は燃え盛る長屋の屋根に乗った

燃えているが踏んだ感触的にはまだまだ持ちそうだ

炎が燃え、夜空を焦がす

私の対面に女性も立つ、刀と殺意が向けられた

「名前は？」

気まぐれに聞いてみた、そういえば鬼の彼女の名前はなんだったんだろうか

鞘を腰に挿す

「……夜露」

「…そう」

返事を期待していなかったがあつたからといって別に何もなかった
戦いを得るたびに私から何か欠けていく気がする

息を吸って、どちらかの死に向かって走り出した

夜露も走り出す

ぶつかり合う寸前、灰鞘を出すと見せかけ身体を捻って廻し蹴りを

叩き込んだ

私の肩から少し血が飛ぶ

本当に迅い刀だ

回し蹴りで大通りに飛んだ夜露を追う、私を待ち構えていた夜露が
刀を袈裟がけに振る

灰鞘で受け左に流す、即座に夜露は刀を引き、返す、避けて今度は

私が斬り込む

刀と刀、ぶつかり合い火花散り、血飛び肉飛び生と死が触れ合いま
た分かれていく

音も理性も本能もなにもかも置き去りにして月の元、私は嗤った

私と夜露は城の屋根の上に佇んでいた

戯れる時間は終わった

眼下では家々が燃えている

夜露は嗤っていた。私はわからない

夜露と私の刀が交じり合う

灰鞘が刀を砕いた

破片に私の顔が写り彼方に飛んでいく、そのまま灰鞘は突き進み夜露を斬った

嗤ったまま夜露は夜に還った

何かが分かりかけてきた

私の中で何かが整理されようとしている

炎が燃える

城も燃え始めた

何もかも燃え始める

炎に照らされ塔が私の前に建っていた

何時の間に

いや、もう何でもいい

私は塔の中に入っていく

背後で扉が閉じた

ぱたん

もう、月は見えない

塔の中は光で満ちていた

巨大な螺旋階段がどこまでも伸びている

頂上が見えない

螺旋階段を昇っている

どこから現れたのか天使が傍らを飛んでいた

なぜか狐の面をかぶって、白い衣をまとうて翼を生やしている

天使は昇るごとに数が増えていく

さざめくような笑い声が塔内に響く

いつのまにか天使は私を囲んでいた

邪魔すぎる

何かが飛んできて私の頬を切り裂いていった

血が飛んだ

狐面の天使たちは笑いながら私を囲んでいる

私は目の前の一体を灰鞘で一刀両断した

同時にまた何かが飛来して私の肩と脚を切り裂いていった

私は走り出した

目の前の天使たちは私にペースを合わせる気がないらしくあつという間に壁となつて立ちはだかった

私もこいつらのペースにあわせる気はない

切り裂き進む

次々と天使達は還つていく

天使の壁を抜けた先には剣や槍・斧を持った天使が待っていた

武具の雨が奔る、走る走る走る

剣を砕き槍を折り斧をかわして塔を突き進む

壁から虚空からあらゆるところから天使達は湧いてくる

道が途中で途絶えていた

私は跳んだ天使を踏みつけ捕まり頂上を目指す

いまや天使は塔を埋め尽くすほど増えていた

天使の翼から離れた羽の一片が私の身体を切り裂いた

天使の羽が飛び私の全身を切り裂いていく

血が舞う

灰鞘で羽を叩き落とす

天使の羽は鋼鉄のような手ごたえがした

私は止まらない

進むたびに血が飛び肉が裂ける

天使の群れのその先に出口らしきものが見え始めた

出口を目指す私に鎖が投げかけられる

弾き避け、鎖は外れて天使を巻き込み落ちていく

出口に向けて私は跳んだ

飛んできた五本の鎖が左腕に巻きつく

私は止まりはしない

私は左腕を斬りおとした
飛び散る血が立ち昇っていく
転げるように出口から外へ
螺旋階段は塔の外に続いていた
月は無い
夜が明け始めている
美しい黒い衣の天使たちが私を取り囲んでいた
顔には黒い狐の面
黒衣の天使が放った一本の矢が私の肩に突き刺さる
私は咆哮し、駆け出す

自分の息づかいが遠くに聞こえる
血を失いすぎて世界が薄暗い
塔の頂上に私は至っていた
夜が明けた
緋色の太陽に映し出された世界は
灰色だった
私は理解した
膝をつく、まるで祈るためのように
この世界はここで終わりだ
これ以上はない
ならば終わらせようこの世界を
私は私の本質を知った
言葉に表すならそれは破壊
次のためではなく次を許さない破壊
終わり続けるための破壊
私はいつのまにか瓦礫の真ん中にいた
私はゆっくりと立ち上がり
世界に灰鞘を突きたてた
滅べ

世界がゆっくりと還っていく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0696p/>

エチュード

2010年11月22日21時14分発行